

SMON 患者の嚥下機能の変化

花山 耕三 (川崎医科大学リハビリテーション医学教室)

西谷 春彦 (川崎医科大学リハビリテーション医学教室)

平岡 崇 (川崎医科大学リハビリテーション医学教室)

A. 研究目的

近年、本邦においては高齢化に伴い摂食嚥下障害者が増加している。同じく SMON 患者においても高齢化に伴う摂食嚥下機能の低下が懸念されている。

我々は、平成 13 年から岡山県下の SMON 患者を対象に摂食嚥下障害に対するアンケートによる実態調査を行っている。また希望者に対しては嚥下造影検査/嚥下内視鏡検査を実施するなど、SMON 患者における嚥下機能の特徴把握ならびに機能維持に努めてきた。

B. 研究方法

岡山県下スモン認定患者を対象とした。方法は対象者全員に郵送で摂食・嚥下に関するアンケートを送付し回答を得た。1 番に摂食嚥下機能に関するアンケートをもとに嚥下障害疑いの割合を例年と比較した。2 番にアンケートの 17 項目の質問に対して、各項目を A: 頻繁に 1 点、B: 時折 2 点、C: 症状無し 3 点として点数付けし、その合計点数を算出し嚥下機能推計値とし、嚥下機能推計値と ADL 評価法である Barthel Index の関係を Pearson の相関分析で調査した。また一般に内服薬は意識低下・筋力低下・錐体外路系の症状などから嚥下障害を引き起こすことが指摘されている。睡眠薬、筋弛緩薬、抗てんかん薬、抗不安薬、抗精神病薬を特定内服薬として嚥下機能推計値と特定内服薬の関係を Mann-Whitney の U 検定で比較を行った。そして嚥下機能推計値と特定内服薬の服用の有無の調査と嚥下機能推計値と特定内服薬の内服数(種類数)の関係を調査した。またアンケートには、川崎医科大学附属病院を受診し、VF を希望するかどうかの意思を問う項目を加えて郵送された。検査を希望した患者を VF の対象とした。検査の手順として、VF で

は安楽な椅子に普通の食事姿勢で座り、ストレート水分、全粥、バナナ、クッキーを自由に嚥下してもらい、側面から撮影する方法で行った。検査を受けた者の検査結果と、アンケート結果を比較した。なお本調査は川崎医科大学倫理審査委員会の審査を受けて行った。

C. 研究結果

有効回答の得られた 61 名中 42 名 (44%) が、アンケートで 1 項目以上 A (頻繁に) すなわち嚥下に関する何らかの問題ありと回答した。この割合は過去のデータと比較して著変はなかった。嚥下機能推計値と ADL の関係は Pearson の相関分析ではあきらかな相関はみられなかった。特定内服薬の有無と嚥下推計値の間に Mann-Whitney の U 検定で有意差はみられなかった。嚥下機能推計値と特定内服薬の種類数の間に Pearson の相関分析であきらかな相関は見られなかった。

D. 考察

例年のアンケートと比較し参加者は減少したものの有意な嚥下機能の低下は見られなかった。参加者の減少には COVID-19 の影響が考えられるが嚥下機能は少なくとも長期的な低下はしない可能性が考えられる。有意差は無かったものの嚥下機能が良い方がわずかながら ADL 能力が高い傾向があり嚥下機能は ADL 能力に影響する可能性が考えられる。嚥下機能と特定内服薬の間には有意な関連は見られなかった。サンプルサイズ/特定内服薬の設定次第で結果が変わる可能性も考えられる。内服薬によっては嚥下機能の改善が期待できるものもあるためそれらを加味した評価も必要と思われる。こんごも SMON の嚥下に及ぼす影響を

明らかにすべく、今後もアンケートや VF など定期的な嚙下機能のフォローアップを継続予定である。